

## 浄土教徒の倫理

― 法然上人の場合 ―

千 賀 真 順

仏教は人間の信奉する教であるから、「現在如何に行動すべきか」は重要な課題である。仏教史の示すように教理の深遠なる展開と共に現実的な實際教化も注目される倫理的色彩の濃厚な教説である。

仏教の道は戒・定・慧の三学であり、八萬の修道法門である。即ち人間存在の分析やサトリについての理論的探究が慧学であり、日常生活に於て止惡修善するのが戒学であり、更にサトリを直接的に体得するのが定学であり、この三学は八萬の法門に細分される。思うに大乘仏教は理論的な教理の深遠が主として尊ばれ、人間倫理の道の実践に欠くる結果を招来した観がある。このことは浄土教としても反省すべき課題であるから法然上人の場合を管見したいと思う。

法然上人の選択本願念仏の信仰と倫理観は仏教の根本

義にも基調する浄土三經に於けるそれと同様なものが見られる。即ち智慧才一の上人は大藏諸經を検討して「法相・三論・華嚴・法華・真言・仏心等の諸宗の教義を研尋して」（漢燈才八）聖道・浄土の二種なるも、而も拾聖帰浄する所以は現時凡夫の私共に適應する三身即一の本願の大慈悲によつて生死解脱の道なることを強調される。即ち「選択集」に

「念仏是勝餘行、是劣、所以者何、名号者是萬德所帰也。然則彌陀一仏所有四智・三身・十力・四無畏等、一切内証功德・相好光明說法利生等外用、功德、皆接在阿彌陀仏名号之中」（法全一四頁）

と説き「名号功德最為勝」として聖道の修善を名号のうちに摂取され、しかも「萬善妙諦」「恒沙功德」とされる。このことは浄土教祖師を全分に伝承すると同時に上人が諸經典を研尋しての仏教の宗教的帰結であつて、倫理を超えた信仰である。又、上人は求道者として自分の苦悶を告白して、

「しかるを我、此身は戒行に於て、一戒をもたず、憚

定に於て一もこれを得ず。人師釈して尸羅清淨ならざれば三昧現前せずと云へり」(法全一五六九頁)

と伝へられ、又「我等が往生はゆめゆめ我身の善惡に依り候まじ。偏に仏の御力計にて候べき也」(和語燈才四)とあつて戒法が中心となる限り。それは飽くまで倫理道德であつて真実の宗教信仰とはなり得ない。戒法の護持し難いことを自覺し、萬人平等なる彌陀大慈悲に徹して眞の信仰に入られたと云うべきであらう。上人の反省されているように

「かなしきかなや、いかゞせん、ここにわがごときは、すでに戒定慧の三学、うつわものにあらす。この三学、の外にわが心に、相應する法門ありや。わが身に、たへたる修行やある」(同上)

とあり、又「十惡の法然」、「愚痴の法然」と愛憎する淺間しい無慚無愧を痛歎されている。素晴らしい宗教的自覺(信機)である。この戒法の否定絶望の底から倫理の道を超えて彌陀大慈悲の信仰(信法)は生れてくるのである。故に「選択集」に

「若以持戒持律、而為本願者、破戒無戒、人定絕望、然持戒者、少破戒者、甚多」(法全一五頁)

と、或は又

「本願の念仏にはひとり立をせさせてすけをささぬなり。すけというは智慧をもすけにさし、持戒をもすけにささず云々」(法全八八九頁)

と云い、又本願一乗の教説を立前とするから、

「釈尊出世の本懷、たゞこのことにありといふべし。

……釈尊の恩を報ずるも、また唯この念仏にありと云うべし」(法全一三〇頁)

と釈尊の仏道の宗教的展開として龍樹以来の浄土教祖師を傳承しておられる。故に上人の仏教が「願彼仏願故」の彌陀大慈悲に徹して五種正行の批判より才四の称名正定業を選択し、読誦・礼拝・觀察・讚歎供養を四種正行、爾餘の六度萬行を悉く雜行として同類、異類、の助業とし、妻子眷屬、財宝、生活の総てを挙げて本願念仏を莊嚴する要素として包み摂めてある。本願念仏こそ道俗の道の大善たることを強調されている。

前述の如く上人の教説は本願念仏信仰にあるから、信者は社会に於ける人としての倫理の道を超へるが、それかと云うて倫理を重視されないのではない、宛も常識的には矛盾するかの如きであるが法然上人には大乘仏教の倫理と云うべき円戒を堅持された史実が注目される。

即ち慈覚大師九代の伝戒の嫡弟であり、（顕浄土伝戒論）而もその戒徳が卓越したこと且つ門葉の興隆した史実が記録される。上人が黒谷叡空より円戒血脈を嫡伝し「一心金剛戒師」として道俗に授戒されたことは既に「玉葉」等の記録によつて立証されている。即ち五十四才の文治五年八月八日、同二十三日の授戒、正治三年八月八日六十八才の時までも授戒されたことは注意される。しかもその記録には「授戒し念仏を始め」とあるから念仏のための授戒で椎尾博士の屢々強調される説戒であつたであらう。（授戒講話）

今日まで先学は上人の戒について仏教の通儀の故に、念仏の助業の故に、門弟の行動を律する為に、法弘通の為に等の理由を挙げているが、宗教の立前より如何に理

解すべきであらうか。上人に「金剛宝戒章」や「浄土布薩式」のような偽書の製せられたとするのもこの解決への実際運動であらう。念仏者に戒法倫理を要求する意義は如何にあるべきか。

「凡念仏行者随分持戒不造衆惡、念々策励、四威儀不

懈怠……總於佛法作恭敬心……故善導和尚所造

観念法門云唯須授戒念仏」（全四〇八頁）

とあり、「少罪も犯さじと思ふべし」（小消息）と幾多念仏者の生活を規制されている。思うに真実念仏して彌陀大慈悲の仏に直結した念仏者には戒法が深く自身を規定するものである。従つて浄土教の宗教的特色としては念仏信仰は戒法の手段でなく止惡修善を目的とはしない。併し信仰者は自身をして恥じない人の生活を反省するか、彌陀オヤのもと同信として私欲的立場か否定されて一切衆生に同明愛を持つ浄土教倫理の面が現われなくてはならない。観經に「慈心不殺」とあるのが世福即ち世間的な実践であるから若し念仏者にこの同朋愛なきときは真の信者ではない。十二問答に

「仏は一切衆生をあはれみて善きも悪しきをもわたし給へども、善人を見ては喜び、悪しきを見ては悲しみ給へり。良き地に良き種を蒔かんが如し、かまへて善人にして然も念仏すべし。是を真実に仏教に従うものと云うなり」（法全三五一頁）

とあるように彌陀オヤのもと仏の心に生きて総ての人々に同朋愛を以て共生する。仇敵定明をも同朋とする法然上人の慈悲愛情こそ真実の念仏者の姿である。故に念仏者の生活態度たる四修特に恭敬修の態度こそ敬虔な信仰感情の具現であるべきである。

善導大師が「仏教・仏願・仏意随順」を以て真の仏弟子であるとし、この仏弟子即ち信仰者としては当然同朋愛に立つ恭敬修の生活態度を以て応分の慈悲行動を実践することこそ浄土教倫理の帰結と云うべきでなからうか。

## 編集後記

先ず最初に今年も無事室報を編輯することが出来たことを編輯者として関係各位に深く御礼を申し上げます。

本年は研究室の諸先生の方針に従つて浄土学より六名、仏教学より四名、史学より二名を選出して寄稿を依頼した。特に千賀先生には御多用の中を無理にお願いして玉稿を頂戴しました。本室報作成に多大の御協力を賜りました、水谷・香川・平・成田先生に深く感謝いたします。編集責任者